

絵本で育む豊かな心

花 田 睦 子

「絵本とは何か」と聞かれた時に、みなさんはどのように答えられますでしょうか。いろんな理論があると思いますが、私が一番大事にしているのは、「絵本とは、読んでもらう本である」ということです。「そんなん当たり前やん。まだ字が読めへん子どもには、大人が読んであげな」と言うのは大きな誤解です。絵本は、字が読めようが読めまいが、読んでもらう本なのです。もちろん、自分で読んでもOKですが、自分で読むとたどり着けない領域というのがあるんですね。読み手と聴き手で楽しむ本、それが絵本です。読み手が聴き手に何かを教えようとしたり、覚えさせようとしたりするような、強制のエネルギーで読む本ではありません。読み手と聴き手が対等、一緒に楽しむ本なんです。

それでは、自己紹介代わりに絵本を一冊読ませていただきたいと思います。

『うえきばちです』 川端 誠 作（BL出版）

この絵本、見てください。表紙には素焼きの可愛い植木鉢が描いてあって、裏表紙にはカントリー調の可愛いくまちゃんを描いてあります。「どんなに可愛い本やろう」と思っ
て中を開けると、鼻毛のおじさんが出てくるという……このギャップが大好きなんです。
まるで自分を見ているようにいつも自己紹介の代わりにこの絵本を読ませてもらっています。
私には外面はいいんですけど、中身はおじさんみたいな性格なので、この絵本が他人事
とは思えず。○歳から大人の方まで、この『うえきばちです』を読んでいます。それで
ね、年齢によって反応が違います。これが面白いところなんです。なんと最年少読者
は一歳ちよつとのあかちゃんです。言葉の意味はまだわからないのに、なぜかこの絵本に
大きく反応する。意味はわからなくてもあかちゃんが好きっていうこともあるんです。と
ころが、私の業界の大先輩は、「え？花田さん、あんな本読んでんの？ 私嫌いやわ。あ
んな顔怖い」という人もおられるんです。OKですよ。正解はありません。自分が好
きだから読んでいるんです。全員が全員大好きな絵本なんて世の中にはありません。好き

な絵本を読んだ時の、年齢によって異なる反応を、私は楽しんでいっているということです。

話は戻りますが、絵本とは読み手と聴き手で楽しむ本。読んでもらう本です。自分で読む読書と、読んでもらう読書は別物と捉えてください。「少しでも早く自分で本を読めるようになるために、幼い時から絵本を読んで訓練しましょう」という考え方は誤解です。文字ばかりの本の方が上、レベルが高い。絵本は下。上のレベルに行けるように、幼い時から絵本を読んで一生懸命訓練してがんばりましょうという考え方は間違いです。上下ではないんです。同じ土俵で比べないでください。別物です。「何が違うのか？」

自分で読む読書は一人でやる行為です。いくら友達と同じ本を読んでも、一緒に読む人はいません。一人で読みますよね。ところが絵本は、読んでもらう本です。ということは、最低、読み手と聴き手、二人以上の人間が必要です。一人孤独か、一人じゃないか。これが大きな違いなんです。だから、同じ土俵で比べないでください。子どもたちが自分で本を読めるようになったら、どんどん読んでもらってください。でも、読んであげられるほうもやめないでください。どちらかを選ぶ必要はありません。両方やってもらってくださいとお願ひしています。

大学生のみなさんも、絵本をどんどん読んでもらってOKです。誰かに読んでもらって

ください。もちろん自分で読んでもOKですよ。自分で読むではダメと書いているのでは
ありません。それだけに留めず、大人同士でも、ぜひ絵本を読みあってください。絵本
は、読み手と聴き手が使う「道具」です。普通はツールと言われていますが、私はあえて
敬意を払って「道具」という言葉に置き換えさせてもらっています。何が言いたいのか。
「使ってください」という事です。家庭に、あるいは学校に置いておいても何の意味もあ
りません。ポロポロになるまで、どんどん使ってください。ポロポロになればなるほど、
一番喜ぶのは絵本です。それだけ手にとってもらえた。それは愛された証です。そして、
人と人を無意識に繋いでくれる道具でもあるんですね。人と人が繋がれる道具なんです。
では、ちょっと使ってみましょう。どんなふうに繋がるか、遊んでみたいと思います。

『やさいの おなか』 きうち かつ 作・絵 (福音館書店)

*会場のみんなに問いかけ答えてもらい遊びながら読む

この絵本は、正しい答えが分かるかという事よりも、描かれている絵がどれだけのもの
に見えるかということが、とつても素敵なことなんです。子どもたちと読んだらすごいで

す。野菜の断面なのに、「太陽!」「ホットケーキ!」「鉛筆!」「タイヤ!」等々、野菜以外のものがいっぱい飛び出します。その度に表紙を見せて「やさいの、おなか」と子どもに詰め寄り遊びます。よく見ると、絵本の中にヒントが隠されていますが、そういうことに気が付くのも子どもたちです。子どもたちは絵を読めるから。

こんなふうには絵本を子どもたちと読みあっているだけで、子どもたちの中に豊かな心が育まれていきます。「え?、野菜の形を覚えるだけで豊かな心なんか育つの?」と、大人は考えがちなんですけれども、いえいえ、とんでもありません。絵本タイムが強制ではなく、聞かされるのでもなく、子どもたちにとっての遊びの時間であれば、勝手にいろんなことを吸収してくれます。目標設定をして「覚えましょう」と努力が必要だったら覚えられないのに、好きなこと、楽しいことは、勝手に覚えるんです。この「好き」とか「楽しい」がすごく大事なことですね。そこから吸収できるものは無限です。大人であつても、それは同じ。遊びを大事にしてもらいたいと思います。

「じゃあ、楽しい絵本ばかり読んでたらいいの?」いえいえ、悲しい気持ちになつたり腹が立ったりショックを受けたり、いろんな感情を体験してもらってください。ポイントは、「心が動く」ということです。心は動けば動くほど豊かになっていきます。絵本と

いう物語を通して、あるいは『やさいの おなか』のような遊べる絵本を通して、いろんな感情を体験することによって、豊かな心が勝手に育まれていくのです。みなさんは、優しさだけで満たされている心を「豊かな心」だと考えますか？ 私はそう思わないんですね。優しさがわかり、憎しみがわかり、傷付くことがわかり、いろんな感情を体験し理解できる人が、豊かな心の持ち主ではないかなと思います。

私たちの中には「名もなき感情」がいっぱいあります。喜怒哀楽だけで表すことのできない……まだ、名がついていない感情っていっぱいあるわけですよ。

「感動して、感動して、感動して、でもまだそこに喜びを足して二で割った感じ」なんていうような表現をすることがありませんか？ そんなふうはまだ名が付いていない感情がいっぱいある、広くて豊かな世界です。そこに働きかけてくれる道具が絵本だということです。

私の心がすごく動いた絵本を紹介したいと思います。『のにつき』（近藤薫美子 B.L出版）という絵本です。近藤薫美子さんという滋賀県の絵本作家さんの代表作です。めずらしく、日記になっている絵本です。はじまりは十一月十三日、一匹のいたちが亡くなった場面から始まっています。

これ、素晴らしい絵本だと思います。最初に出会った時とても感動しました。何が素晴らしいと思ったか。命の循環が見事に描ききつてあるからです。地球上における命の循環です。一つの命が、どれだけの他の命の役に立っているか。無駄なく他を生かしているんですね。最後は土の栄養となつて、そこからまた美しい花を咲かせている。そんな循環が見事に描ききつてあります。命って本当に大事なんだということが、この絵本から伝わってきます。でも文章はありません。著者の近藤薫美子さんはおっしゃいました。「命という言葉を使わずに、命を描きたかった」まさにそうなっています。「命は大事」そんなことが、絵で描かれているんですね。また、その時々 of ウソ偽りない事実がしっかりと絵で表現されているということも素晴らしいと思いました。その場の温度や湿度まで感じられるように思います。これが絵本の力です。理屈ではなく、絵が語っている。その絵を読み取れるのが子どもたちです。

実際この絵本を子どもたちと一緒に読んでみて、どう感じるか。当然、バラバラです。感じ方は人それぞれ。「怖いから二度と開きたくない」という小学生もいます。「見えるところに置かん」といって「そんなふうに言う子どももいます。それでOKですよ。それぐらい

何かを感じ、心が動いたということですから。あるいは、「虫の吹き出しに書いてあるコメントが面白い」「うちの息子、命なんかこれぼっちも感じずに、これ読んで笑ってたわ」これもOKですよ。深読みする必要はありません。感じ方は人それぞれですから。

また、こんな絵本もあります。これは『ハリネズミと金貨』（V・オルロフ 偕成社）というロシアの物語です。

この絵本の中には、「共に生きる社会とは、どういう社会か」「本来のお金の意味」が盛り込まれています。でも、大人が使うような説教くさい言葉は一つも出てきません。ただ、物語になっているだけです。幼児がわかる言葉で物語になっているだけなんです。

絵本は質の高い内容を乳児の言葉に置き換えてあるのが絵本です。五歳の表現に置き換えてあるのが絵本です。絵本の中身は質が高いというふうに捉えてください。

もう一冊、こういうエピソードも紹介させていただきます。

『ぶくちゃんの すてきなばんつ』ひろかわ さえこ 作（アリス館）

ちよっとトイレトレーニングっぽい絵本なんですけど、私の大先輩がこの絵本を高校生に

授業の中で読みました。高校生ですよ。そうしたら、終わってから一人の女子高生が、つかつかと歩いてきて先輩に一言、言ったそうです。「失敗してもええねんな」と。先輩も一言。「うん、ええんよ」交わされた言葉はたったそれだけです。その子の胸には『ぷくちゃんの すてきなぱんつ』がしっかりと抱かれていたそうです。そんなエピソードもありました。高校生のみんながみんな、『ぷくちゃんの すてきなぱんつ』を読んで、「大丈夫、大丈夫。失敗してもまた次がある」と励まされるか？ もちろんそうではありませんが、そんなことが起こる可能性がある。絵本にはそれぐらいの力があるということなんです。

○歳向けにはこの絵本、○歳になったらこの絵本、と棲み分けされる方もおられますが、私はそれはもったいないと思います。年齢で決めつけるのは本当にもったいない。もし年齢で決めつけたら、高校生の読む本の中に『ぷくちゃんの すてきなぱんつ』は入りません。でも、そんな垣根を越えたときに、そういう喜ばしい奇跡、変化が起こるわけなんです。ぜひ、年齢という枠を越えて絵本を手にとってみてください。

こんな本もあります。これは『スイミー』で有名なレオ・レオニさんの作品です。私自身がこの絵本に出会って、人生が一八〇度変わりました。『ペツエッティノーじぶんを

みつけたぶぶんひんのはなし―』(レオ・レオニ 好学社) という副題が付いています。私はこれを二十歳ぐらいの時に本屋さんで立ち読みして人生が変わりました。「絵本ってすごいな、子どもだけのものにしてくのは本当にもったいないな、大人が読んだってものすごく感動するやんか」と、衝撃を受けたんです。内容は、またみなさん、図書館で借りて読んでいただいたらいいかなと思います。これは自分で読んでも十分感動できる絵本です。

そんなふうには、たった一冊の絵本が人の人生を変えたり、誰かを励ましたり。絵本は非常に不思議な道具なんです。ぜひ、みなさんも絵本を手にとってみてください。そして「絵」を読んで感じてください。絵が語るのが絵本の特徴です。「子どもは絵を読み、大人は字を読む」これが絵本をした時の大人と子どもの違いです。文字だけを読んでいるのでは絵本を読んでいることにはなりません。ぜひ、絵を読んでいただければと思います。

ということ、最後に『ねこのピート』(エリック・リトウィン ひさかたチャイルド) を読ませてもらって終わりたいと思います。

絵本で育む豊かな心、心は動けば動くほど豊かになっていく。どうぞ、感じるということを忘れずに絵本を開いてください。

どうもありがとうございます。

—— 質疑応答 ——

【フロアー1】 こども教育学科の学生です。今までたくさんの本を読んでこられたと思うんですが、一番この本が好きだったっていう本を教えてくださいだけだと思います。

【花田】 はい、難しい質問がありますがありがとうございます（笑） 一番と言われると、好きなのはいっぱいあるので、しかもその時々違うんですけど、たった一冊だけ選べって言われると、やっぱり『ペツエッティーノ』になります。私の人生を本当に大きく変えた一冊なので。ぜひ、読んでみてください。ありがとうございます。

【フロアー2】 主婦ですけれども、実は東京に行っていた時に、東京子ども図書館の松岡享子さんに憧れまして、子どもができてから絵本をすごく好きになりました。図書館の絵本の読み聞かせ研究会にも行ったことがあります。一番聞きたいのは、自分（先生）がお好きな本を読んでいらっしゃるのか、例えば、幼稚園の子どもとか、小学生の子どもとか、たくさん絵本を持ってきて「これ読んで」ということになると思うんですけども、どちらがよろしいのでしょうか。

【花田】 ありがとうございます。私は「どちらも」読んでいます。「どれが正しい」というのを、できるだけ決めずにやってみるんですね。自分の好きな本も読む。子どもが持ってきた本も読む。自分も子どもも選ばない、でも、ずっと読み続けられているロングセラーも読む。他の方のおすすりも読む。間口は広い方が良いというのが私の考えなのでね。どれが一番いいかって勉強して、それを選択することももちろん素敵なこと、素晴らしいことだと思います。私はそれもひっくるめて、目の前の子どもに寄り添った本選びと、本の読み方を一番の基準にしてるんですね。例えば、六歳だけど、まだお話が聞けない、小さい時から絵本を誰にも読んでもらっていないから絵本体験が少ない子ども。そうする

と、六歳だから長いお話聞けるでしょっていわれても無理ですよ。なので、絵本を読んでもらう楽しさや喜びを、まだ知らないなと察した時には、『いないいないばあ』から始めたりすることもあります。さっきの『やさいの おなか』のような、遊べる、楽しい絵本から始めて、「絵本って楽しい」と思う気持ちを、まずプチツと弾けさせて、それからだんだん長いお話を聞けるように、とやっています。

私が基準に置いているのは目の前の子どもです。その時、目の前にいる子ども。だから、やることがバラバラなんです。子どもによって手段を変える。読む本を変える。今日は遊び読みの絵本でしたけど、『ももたろう』（福音館書店）『きつねのおきゃくさま』（サンリード）のような名作は今日のような読み方はしません。淡々と、お話を置きにくいような感じで読んでいます。絵本によって読み方を変えているんですね。目の前の子どもによって選ぶ絵本を変え、目の前の子どもと絵本によって読み方を変えることで、間口を広くしています。その中で、松岡享子さんや松居直さんの絵本論で勉強した事をどう使うか？その基準は目の前の子どもです。参考にしてください。